

電照ぎくにおけるミカンキイロアザミウマの発消長と苗圃の物理的防除法

電照ぎくにおけるミカンキイロアザミウマの発生源は苗による持ち込みである。被害を少なくするには、苗圃と定植直後の本圃の防除を徹底することが重要である。なお、光反射マルチはアザミウマ類に効果が高く、苗圃の防除手段として有効である。

農業研究センター農産園芸研究所病虫部（担当者：行徳裕）

研究のねらい

ミカンキイロアザミウマは食害によりきくの花の外観を大きく損なうとともに、きく黄化えそ病を引き起こすトマト黄化えそウイルスを媒介するため、きくの最も重要な害虫となっている。本害虫は農薬によって防除されているが、散布回数が多いために省力的な防除技術が必要とされている。

このため、きく黄化えそ病が問題となっている電照ぎくにおける本害虫の生態を解明するとともに、物理的防除資材を選定し防除の省力化を図る。

研究の成果

- 1 電照ぎくの苗圃におけるミカンキイロアザミウマの発生は多いが、電照ぎくの栽培期間(9～3月)の周辺雑草地における発生は極めて少ない。このため、ミカンキイロアザミウマの主な進入経路は定植後のハウス周辺の飛び込みより寄生苗の定植によるものと考えられるので、定植前の苗圃または定植直後の本圃における防除を徹底する。
- 2 12月の開花時期まで本圃におけるミカンキイロアザミウマの発生は極めて少ないが、12月出しの花を収穫した後、切り残しの花やハウス内雑草で寄生が観察され、発生量が増加する。このため、ミカンキイロアザミウマの発生を抑えるには、切り残した花を処分するとともにハウス内の除草を徹底する。
- 3 光反射資材(光反射率80%以上の資材)の畝面マルチ、目合い1mmおよび2mmのネット資材の被覆によってスリップス類の侵入量を1/4～1/5に低下させることができる。
- 4 光反射資材の畝面マルチによりきく花叢に対するスリップス類の寄生量を1/5に低下させることができる。

普及上の留意点

- 1 ミカンキイロアザミウマの発生は作型や定植時期により異なり、本試験データは8月下旬～9月上旬定植の電照ぎくを対象としているので留意する。
- 2 光反射資材による侵入防止効果および寄生防止効果は完全ではないので、農薬との組み合わせが必要である。
- 3 光反射資材を畝面にマルチすると地温が低下するので注意する。

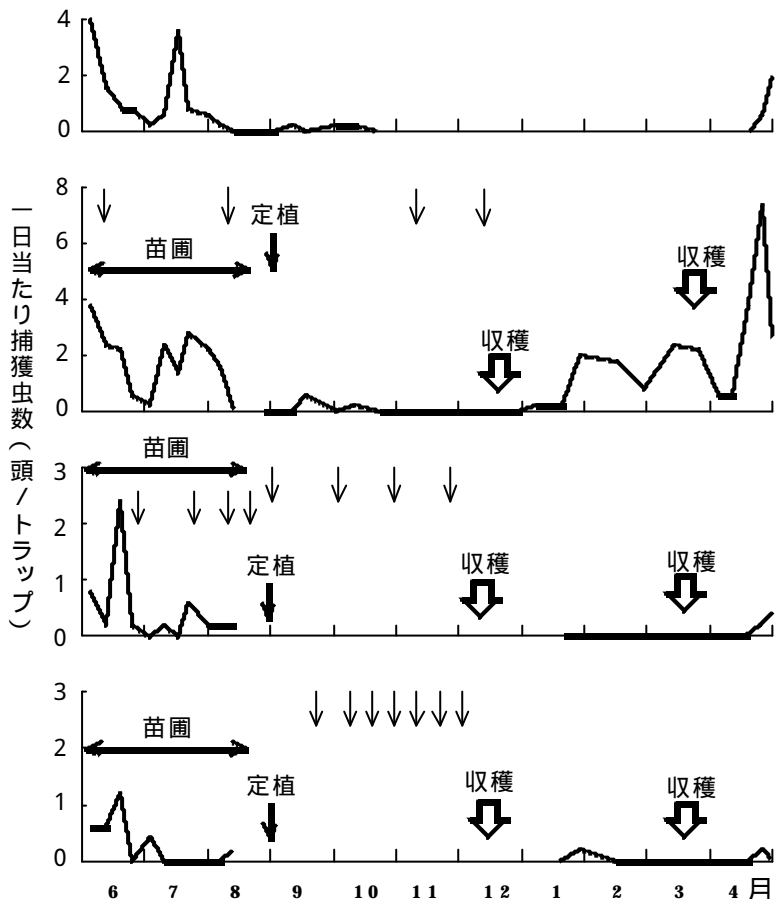


図1 現地におけるキク苗圃，本圃および周辺雑草地におけるミカンキイロアザミウマの発生消長  
 最上段：周辺雑草地  
 2～4段目：現地3農家の苗圃および本圃  
 ↓：ミカンキイロアザミウマを対象とした薬剤散布

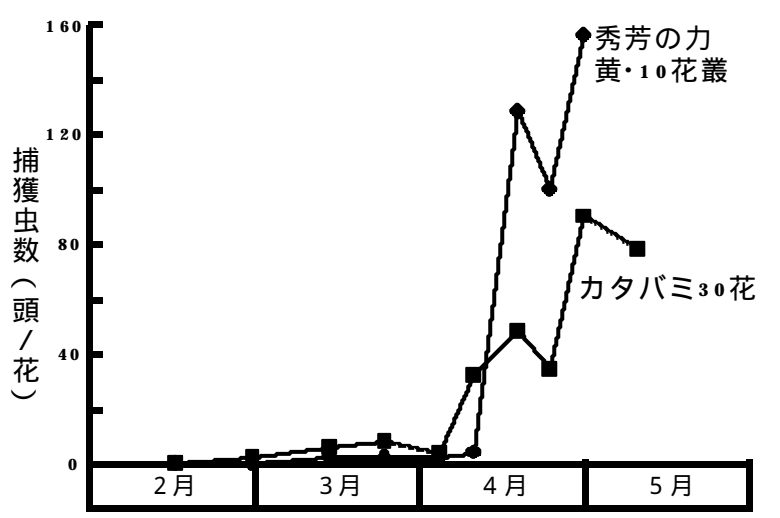


図2 開花中のキクおよび雑草におけるミカンキイロアザミウマ成虫の捕獲消長

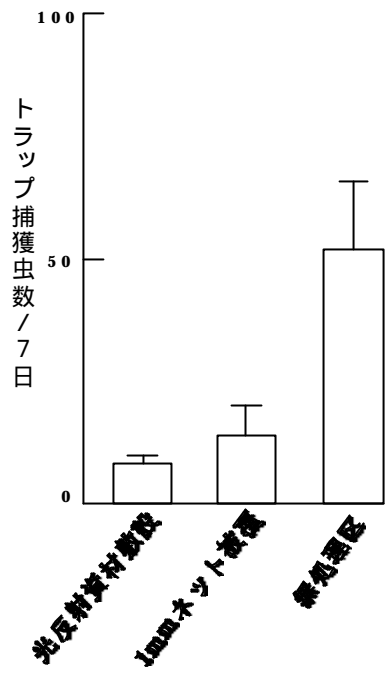


図3 物理的資材のスリップス類に対する侵入防止効果

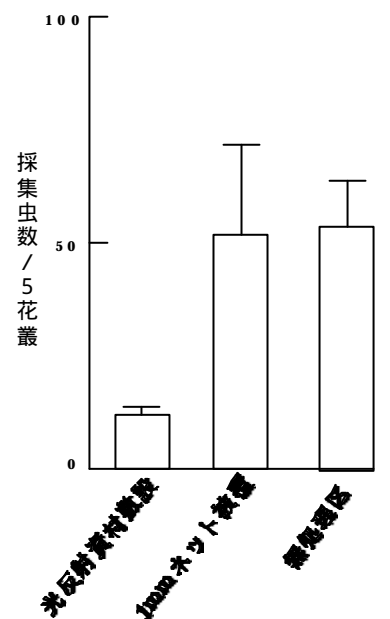


図4 物理的資材によるスリップス類成幼虫の寄生防止効果